

Title	赤城君を憶ふ
Author(s)	織田, 萬
Citation	經濟論叢 (1934), 39(2): 278-280
Issue Date	1934-08-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/130483
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 二 第

卷九十三第

行發日一月八年九和昭

哀 辭
故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論 叢

骨牌税に就きて……………法學博士 神戸正雄
供給曲線の性質……………文學博士 高田保馬

時 論

輸出統制の諸問題……………經濟學博士 谷口吉彦

研 究

貨幣的景氣論史……………經濟學士 柴田敬
金物價と貨幣價值安定……………經濟學士 松岡孝兒
アダム・スミスの廉價即豊富論……………經濟學士 白杉庄一郎

記 事

田島博士逝く
故田島博士年譜及著書論文目錄
追憶文

織田 萬	神戸 正雄	山本美越乃	財部 靜治
河田 嗣郎	本庄榮治郎	小島昌太郎	大國 壽吉
汐見 三郎	黒正 巖	田島 順	石川 興二
谷口 吉彦			

附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

追憶文

赤城君を憶ふ

織田 萬

田島君とは學生時代からの知合で、留學時代にも伯林で暫く一緒になつてゐたし、又三十有餘年の間同僚としてゐて、漢文口調で云へば詩酒追隨の間柄であつたのに、俄かに幽明相隔つるに至つて、只管寂寞の感に堪へない。

君は江戸がまだ東京とならぬ時に牛込の赤城下で生まれたさうで、赤城の號はそれに由來するのであるが、至つて勝ち氣で、又氣早かつたところは、名實共に生粹の江戸ツ子であつた。勝ち氣だから無論負けることが嫌ひだつたが、勉強家と云ふ資質は缺けてゐた。その代り非常に明敏な頭腦を持つてゐて、奇智縦横とでも云ふべき型の人であつて、學問の上にも自然その長所が發揮され、どんなむづかしい問題に出會つても、

直にその要領をつかみ得ると云ふ工夫であつた。學生時代には高橋作衛君と首席を争つてゐたが、高橋君が豪放に見えながら極めて細心であり、學課の練習なども几帳面にやつてゐたのとは異なつて、田島君は全くその才智を以て終始したやうであつた。

經濟學に就いては私は門外漢であるが、田島君の得意は主として一般理論であつたやうに思はれる。さうして時勢も違つてゐたので、謂はゆる象牙の塔に立籠り、今日のやうに街頭に進出することはなく、殊にいくらか狷介なところもあつて、俗物との交際を好まなかつたし、又夙に社會主義を研究し、社會政策に關心をもつてゐたので、資本家側からは自然敬遠される氣味もあつたらしく、かたがた以て財界には餘り重きを置かれなかつたやうである。その學生時代に在つて率先して社會主義の研究に興味をもつたものの、どこまでも正統學派の軌道を嚴守し、マルキシズムの侵入に對しては、まとも立つてその攻撃に當つたのも、やはり君が理智の力によつて、あらゆる學說の要領をつか

むに敏捷であつたからであらう。

我が邦の近世經濟學の先達としては、田尻、和田垣、金井の三博士あり、又之に次いで松崎、山崎の二博士があるが、經濟原論を講述して最も完全に、又最も系統的であつたのは、蓋し田島君であつたらう。この點から觀て、君はたしかに我が近世經濟學建立者の一人であつたと謂はねばなるまい。君が帝國學士院會員に勅任されたのは、専らこの功績によつたのである。

君は晩年經濟と道德との關係を論ずるに當つて、支那の古典に現はれた經濟思想の研究に興味をもち、經書を始めとして諸子百家の書の涉獵に進まんとした。君は弱冠にして三島中洲先生の門に入り、漢學の修習にいそしんだだけに、漢籍を読みこなすことにかけては、我が經濟學者中に君を措いて外にその人を求むることを得なかつたので、かかる研究は君の獨壇場とも謂ふべきであつて、隨つて私は君の晩年を飾るに最も適切な事業だと信じ、機會ある毎に激勵し、君も亦自ら任ずるところがあつた。事業が元來容易でない

上に、平生の善飲が多少累をなしたのか、近年昔日の氣力稍や乏しいやうに見え、それが爲め事業が思ふやうには捗取りかねたでもあらうが、しかし幾篇かの論文が相次いで發表されるのを見て、私は竊かに喜んでゐた。さうしていつかその完成を見るべく期待してゐたのに、不幸にして中道に斃れたのは、誠に痛惜の至であつた。

江戸ッ子の氣早い特性として、癢にさはることがあれば、早速晴天の霹靂となり、相手かまはず、鐵拳が飛ぶか、怒聲が轟くかであつたが、しかし迅雷一過後は、打つて變はつての朗かさであつた。どう云ふものか、多くの友人中私のみは唯の一度も喧嘩を吹きかけられたことがなかつた。そうして君もそれを不思議だと云つてゐた。

君の奇智縱横は平生談笑の間に窺はれたが、君が好んで作つた漢詩などにもそれが發見され、中には却て技巧に過ぎるものもあつた。留學時代にはよく打連れでビヤライゼをやつて、記念繪葉書を方方に送つたり、

又お互に遣取りをしたものだが、そんな場合には狂詩や狂歌が氣がきいてゐて又面白くもある。さうして君が得意の頓智のひらめきはかかる咄嗟の間に殊に著しく、全く奇想天外より來るの趣きがあつた。或る日、時の公使館書記官萩原守一君と二人で君を待ちぼうけさせたことがあつて、私がその詭言を狂詩にしてやつたのに對し、君がそれに次韻して返して來たものに、

粹筋^{イキナスヂトハ}迂生^{シモ}少不^{イッモ}存、何迄^ト青青只松原

と云ふ二句があつた。これなどは實に狂詩としての絶調と謂はねばならぬ。又ゲツチンゲンにゐた山田三良君のもとに二人でいたづら書きをしてやつた繪葉書に、君が書きつけた狂歌は、

山だしのものにさぶらふと名にし負はば月沈原の
奥に引込め

と云つたかと記憶する。こんな手極は到底他の追隨を許さないものであつた。

四十餘年間の交遊で、而かも随分一緒に飲廻はつたこともあるので、君の逸事と云つたやうな話柄は、數

限りない程であるが、學術雜誌に載せるには相應しくないやうに思はれるから、ここには遠慮して、以上二つの留學當時の思出を記すだけにして置く。